

熊本のロシア兵捕虜 望郷のフィンランディア

藤本 誠

一 熊本のロシア兵捕虜

『九州日日新聞』（明治三八年三月三〇日発行）に「捕虜來着（第一回 第二回）」の記事がある。

「奉天附近の大会戦に於て我軍に投降したる
俘虜中熊本に收容さるべき五千名の内、将校以
下九百七十四名は昨日午後四時四十三分熊本駅
着及び昨夜午前零時十一分同駅着にて到着した
り。其第一回分は

将校	二十名
外に徒卒	十九名
下士卒	四百四十二名

にして、将校は熊本千反畳町收容所（注・物
産館）に收容し、下士卒は渡鹿收容所（注・練兵場）
に收容したり。又其第二回分は

下士卒 四百九十二名

にして、第一回俘虜と同様渡鹿收容所に收容
されたり。俘虜の道筋は停車場（注・現熊本駅）
より細工町・唐人町・紺屋今町（注・新道病院
通り）・水道町・千反畳町（注・県庁前通り）・建丁・
明午橋・新屋敷町等を経て渡鹿に至りたるが、
市の内外より群集したる見物人頗る多く、憲兵、
警察は終始四辺を警戒して注意怠りなかりし。
尚到着の模様は更に別項に於て詳記すべし」

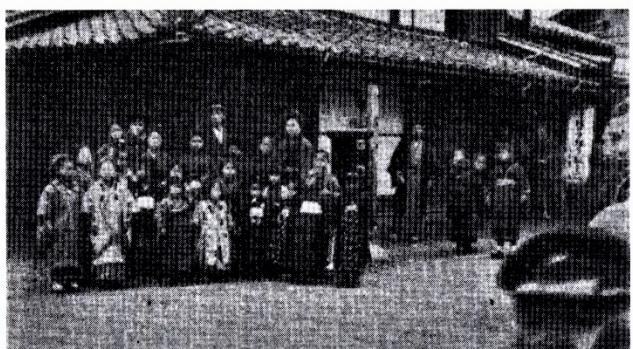
一九〇五（明治三八）年三月の奉天での最後の大
会戦で日本軍は七万人の死傷者を出したが、この時
第六師団は第四軍に属し、およそ一万のロシア兵を
捕虜にした。同年三月二九日、そのロシア兵捕虜第
一陣九七四人が二回に分け到着し、渡鹿收容所に收
容されたのである。



AT WORK—CATHARINE SCHERRER MEMORIAL, JAPAN.

日本福音路帖熊本教会 (Catharine Scherer Memorial Church) 建設現場
(1905 (明治 38) 年、[TIDINGS] より)

ロシア兵捕虜が送られて来る前、三月三日に、第六師団司令部が熊本駅に凱旋した。駅前通りには国旗や旭日旗に飾られた凱旋祝賀の門が南九州四県民の手で建てられ、大群衆が歓呼で迎えた。その後、奉天から送られ熊本駅で降り立つたロシア兵捕虜はその凱旋門を通り、細工町入口にも設けられた凱旋祝賀門を潜つて商家が建ち並ぶ市街へ入り、新道病院通りを経て教会堂建築中（明治三八年六月二〇日竣工）の日本福音路帖熊本教会の前（水道町）を行進し、県庁や県会議場、市役所等などが集中する県庁前通り（現・国道3号線）へと向かったのである。



日本福音ルーテル熊本教会日曜学校の教師と子どもたち。収容所へ向かうロシア兵捕虜を熊本教会の信徒も見物したのかもしれない。

さらに県庁北から右折して明午橋通りへ入り、将校はそこで物産館（注・古城地区から移築された洋学校教師館・ジエーンズ邸）に収容された。兵卒は熊本教会の講義所があつた建丁を通り、明午橋にかかる。白川を渡ると、ブラウン宣教師宅のあつた新屋敷町を経て渡鹿の練兵場へと向かったのである。戦勝ムードに湧く中、熊本教会前の沿道は、初めて目にするロシア兵捕虜一行を見物する群衆でごつた返したことであろう。

ロシア兵捕虜は、この後も次々に送られてきた。『九州日日新聞』（明治三八年六月一日発行）は次のように報じている。

「日本海海戦の捕虜は予報通り、昨日また

一千人が着き、本日さらに五百人が送られてくるはずだが、千反畠収容の将校二十五人、従卒二十四人、阿弥陀寺町収容の将校二十人、従卒二十人と昨日まで渡鹿に収容した全数と、明日の五百人を加えると、実に五千五百七十七人となり、それに海軍将校三十人も近々送られてくる予定なので、これに従卒を加えたならば、当地に収容される捕虜の総数は約五千七百人に達することになる」

最終的に熊本で収容したロシア兵捕虜の総数は六〇〇三人となり、翌一九〇六（明治三九）年一月二七日までに離熊した。

二 ロシア帝国とフィンランド

²ロシア帝国ロマノフ王朝最後の皇帝・ニコライ二世治世下のロシアでは、日露戦争最中の一九〇五（明治三八）年一月二二日、「血の日曜日事件」をきっかけにして労働者のゼネストが頻発し、ロシア第一次革命が発生した。ロシア帝国の体制を支えてきた皇帝專制主義（ツアーリズム）がゆらぎ、政情が不安定化した。ロシア軍は同年三月の奉天会戦で敗北し、五月二七、二八日の日本海海戦でバルチック艦隊が

壊滅。日露戦争は、同年九月五日のポーツマス条約調印によって終戦となつた。

熊本でのロシア兵捕虜の将校への待遇はよく、酒や煙草の喫飲が許され、許可を得て洋服の仕立てに行ったり、阿蘇に登山に出掛けたりしている。帰国前には、手取本町にあつた静養軒で予餉会まで開かれた。渡鹿練兵場に収容された兵卒には待遇に不満があつたのか、六月一六日には騒動が起きている。夜中に収容所を脱出して市中を徘徊する者も出て、風紀が乱れた。

ロシア兵捕虜の中には、北欧フィンランドの福音ルーテル派の教員がいた。日露戦争当時、フィンランドはロシアの属国だったのである。

一八〇一年に即位したロシア皇帝・アレクサンドル1世（在位一八〇一年、一八二五年）は、一八〇八年にイギリスと同盟を結ぶスウェーデンと開戦して勝利し、翌一八〇九年のフレデリクスハムンの和約でフィンランドとオーランド諸島を併合した（第二次ロシア・スウェーデン戦争）。フィンランドは自治大公国としてロシア帝国に組み込まれ、ロシア皇帝がフィンランド大公を兼ねた。アレクサンドル1世が、任命した総督と大公国評議会を介する立憲君主として統治した。ロシア帝国はフィンランド（芬蘭）の従来からある基本法（憲法）や身分制議会を始め

とする統治機構、さらにルター派教会の存続を保証し、ロシアとは別個の国家として扱つた。^③

アレクサンドル2世（在位一八五五年、一八八一年）が大改革を実行した際、一八六三年に身分制議会が半世紀ぶりに召集されて議会制度が機能し始めた。この時期にフィンランド語の国語化、農民の地位向上、初等教育制度の確立といった諸改革が行なわれた。一八六〇年代から一八七〇年代に自由主義的な規制緩和立法の下で、フィンランドの工業生産は急成長し、ロシア帝国内で最も進んだ地域となつた。こうしたフィンランドの「特別な地位」についてロシア国内では異論があり、ニコライ2世（在位一八九四年、一九一七年）は、一八九九年に「二月宣言」を発表してフィンランドの自治権を剥奪するロシア化政策を推進した。^④

一八九八年、ニコライ2世によってフィンランド総督に任命されたニコライ・ボブリコフは、一九〇〇年、フィンランドの官庁に対して全公文書のロシア語化と学校教育におけるロシア語教育の徹底を指示。フィンランド語は禁止され、公用語としてロシア語が強要された。さらに、一九〇一年にはフィンランド軍を廃止し、フィンランドにおける募兵をロシア全土に赴任させることを強制可能にした。しかし、フィンランド人は民族意識に目

覚め、これに反対する抵抗運動を組織した。そして、日露戦争の最中の一九〇四（明治三七）年六月一七日、フィンランド民族主義者オイゲン・シャウマンがフィンランド総督・ボブリコフを暗殺するという事態に至つた。一九〇五年、ロシア第一革命の際にはフィンランドでは「大ストライキ」が行なわれ、ニコライ2世は「二月宣言」の撤回を余儀なくされた。^⑤ そして、フィンランドにおける徴兵は廃止された。この結果、身分制議会に代わる一院制の国民議会が成立した。この議会は女性の参政権を認められるヨーロッパ二番目の議会であった。しかし、ロシア国内でスタイルピンが大臣会議議長（首相）に任命され、「外見的立憲君主制」（ドイツ社会学者マックス・ウェーバーの用語）の政治体制に移行すると、ロシア政府は一九〇九年以降、再びロシア化政策を行なつて弾圧を強化した。^⑥

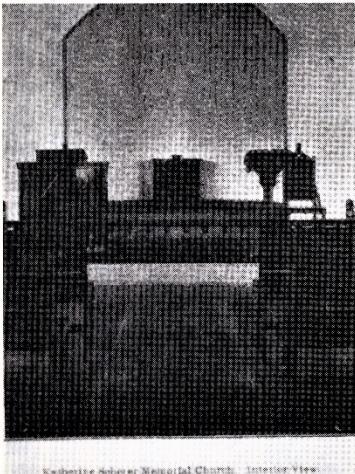
三 フィンランド福音ルーテル教会員の望郷 の祈り

日露戦争の陸上における決戦となつた奉天会戦では一万人のロシア兵が捕虜となつたが、その頃フィンランドではロシア第一革命下ロシア帝国の支配に対する抵抗が激化し、フィンランド人のロシア兵は

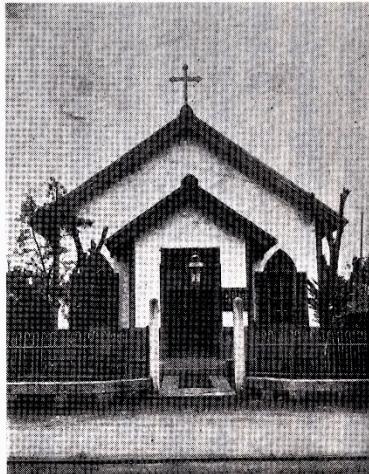
ロシア帝国への忠誠心も戦意も喪失している状況にあつた。その結果、多くのロシア兵が投降し、捕虜になつたのである。

熊本に送られてきたロシア兵捕虜の中の福音ルーテル派の教会員たちが、一九〇五（明治三八）年六月二〇日に献堂したばかりの熊本教会の礼拝に参列した。『日本福音ルーテル教会 創設二十年記念史』（大正三年四月一五日発行、日本福音路帖教会創立式拾年記念会、代表者・和佐恒也）には、次のように記されている。

「悲惨なる日露戦役に於て捕虜として熊本に収容されし六千有余の露国軍人中に、福音路帖教会員なる二名の士官と百四十三名の下士卒ありて、滯在中に来りて我が教会の礼拝に列した。敵味方の地位にありて言語通ぜず、且互に風俗習慣を解せずして、しかも剣銃を提げたる兵士の護衛の下に、共に跪きて三一の聖神を礼拝したる有様を追想する毎に、いふべからざる感慨が胸中に浮び出て来る。其の時彼等が抛出して贈られし寄附金を以て、記念の為に時計を購入した。今会堂にある大なる時計はそれである」

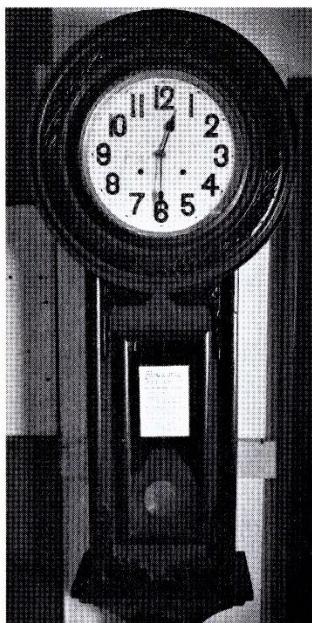


礼拝堂内部（「TIDINGS」より）



日本福音路帖熊本教会堂（水道町）

ここには「露國軍人」中の「福音路帖教会員」と記されているが、これはフィンランド人のロシア兵捕虜だったという。一九〇五年に献堂された熊本教会堂（注・Katherine Scherer Memorial Church）は、一九四五（昭和一〇）年七月一日の熊本大空襲で記念の大きな古時計ともども焼失した。その時計には、



寄贈された大時計と同型の時計。現在、熊本教会に掛けられている。

寄贈したフィンランド人の名前が三六名記されていたという。^② 熊本教会堂での礼拝の司式や説教は山内直丸牧師が担当したのであろうか、それともC・L・ブラウン宣教師が担当したのであろうか。フィンランド語を介さず聖礼典の内容は理解できなかつたであろうが、礼拝に与つた靈的癒しは渴いた魂に感受されたに違ひない。捕虜となつて異士に身を置く彼らも、ロシア帝国の戦役に駆り出され、故国では家族がツアーリズムの圧制に喘いでいるのである。悲痛な魂の祈りが、遙かな北欧スオミへの望郷の念とともに新会堂に満ち溢れたに違ひない。

一四五名のフィンランド人福音ルーテル派教会員は、異国で思いがけず聖礼典に与ることができた感謝の気持ちを籠め、なげなしの金をはたいて主に献げた。それを寄附金として、熊本教会は会堂に記念

熊本教会堂での礼拝の司式や説教は山内直丸牧師が担当したのであろうか、それともC・L・ブラウン宣教師が担当したのであろうか。フィンランド語を介さず聖礼典の内容は理解できなかつたであろうが、礼拝に与つた靈的癒しは渴いた魂に感受されたに違ひない。捕虜となつて異士に身を置く彼らも、ロシア帝国の戦役に駆り出され、故国では家族がツアーリズムの圧制に喘いでいるのである。悲痛な魂の祈りが、遙かな北欧スオミへの望郷の念とともに新会堂に満ち溢れたに違ひない。

軍都・熊本で一〇カ月余りを送つたロシア兵捕虜たちは、翌一九〇六（明治三九）年一月に故国を目指して熊本を発つた。当時の熊本教会は、日本福音ルーテル教会にとって欠くことのできない重要な中心基幹教会となつていた。

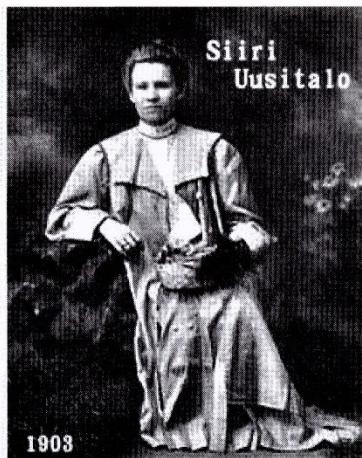
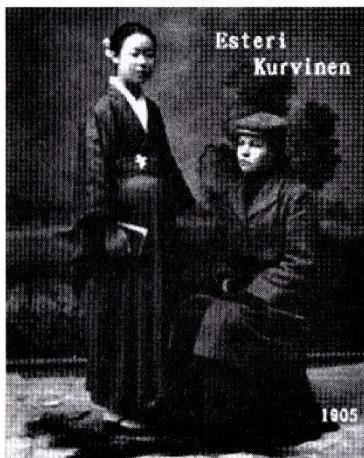
四 フィンランドルーテル福音協会の日本伝道

一方、フィンランドからは一九〇〇（明治三三）年に宣教師が来日していた。フィンランドルーテル福音協会から派遣されたヴエルローズ牧師一家とクリスティネン（Miss Esteri Kurvinen、当時一六歳）が、一二月一三日に長崎に到着したのである。フィンランドルーテル福音協会（SLEY、英語の略称ではL E A F）はフィンランドの国教会であるルーテル教会内の信仰覚醒運動の団体として一八七三年に創立し、もっぱら国内で活動していたが、海外伝道にも眼を向けるようになったのである。当時はロシアの一部であり、経済力にも乏しい国であるのに、牧師、青年指導者や教会教育などの信徒を宣教師として送

り出すことになった。⁽⁸⁾

一九〇〇（明治三三）年一二月一三日は、日本福音ルーテル教会最初の佐賀教会堂が竣工し、献堂された記念すべき日である。また、翌一四日には、C・J・ブラウンが家族と共に熊本在留最初の宣教師として赴任し、本格的に熊本伝道を開始した。このフィンランドからの宣教師の来日について、『路帖教報』⁽⁹⁾第九號は次のように報じている。

「ルーテル教会員は四千余万人あつて、世界至るところにルーテル教会員のあらざる所なしとは本紙第一號に記載せる所なるが、今度歐洲北部のフィンランドより宣教師一家族は一女教師と共に長崎に来られたり。此等は我ルーテル教会と共に提携して働く筈にて本月（明治三十四年三月）十五日佐賀に行かるる様約せられたり。然るに去る六日俄然愛兒が永眠せられたる故、期日の通りに赴かるるや否やを確定せず、吾人は万里の異郷に於いて此の悲事に遇へるこの一家に満腔の同情を寄すると共に、永遠の生命の貴重なるを一層篤く感じて宣教の聖職に勤められんことを祈るものである。又未だ何組に属するかは知らざれども、近頃一人のルーテル派宣教師が東京に來りしといふ」

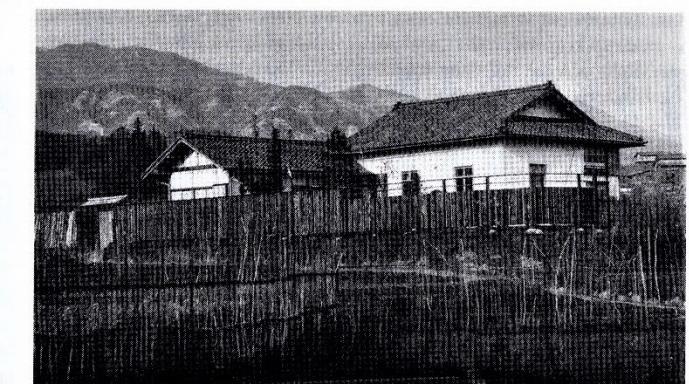


クルヴィネンとウーシタロ
(二人の女性宣教師：日本福音ルーテル教会アーカイブス)

長崎で日本語を学習した後は佐賀に合流する協議が整っていたが、『路帖新報』が報じているように、ヴエルローズ牧師は長崎で子を亡くし、一家も病氣がちになつて、一九〇一（明治三四）年九月に帰国した。弱冠一七歳のクルヴィネンだけが同年佐賀に

赴任し、リッパード (Rev.C.K.Lippard,D.D.) などと協力して日本福音ルーテル教会の伝道を援けた。⁽¹⁰⁾

一九〇三（明治三六）年一一月九日にはウーシタロ (Miss Siiri Uusitalo) が女教師として長崎に着き、リッパードとクルヴィネンの出迎えを受けて、翌一〇日、佐賀に到着した。フィンランドルーテル福音協会は、既に伝道の拠点教会を築いていた米国南部一致ルーテル教会と協力し、ルーテル教会の伝道に当たる計画であったので、佐賀に赴任したのである。しかし、翌一九〇四（明治三七）年二月、日露戦争が勃発すると、ロシア帝国の属国であったフィンランドは日本の敵国となり、クルヴィネンとウーシタロの二人は佐賀を離れ、東京に移住して待機せざるを得なくなつた。日露戦争でロシア軍が大敗した一九〇五（明治三八）年の夏、二人の女性宣教師は新天地を求めて東京から富士見まで列車で、その先を徒歩や馬車で進み、長野県下諏訪町湯田新田に辿り着いた。豊かな自然と湖のある風景がフィンランドと似てゐるのに感動し、ここに本拠を据えて伝道を開始したという。ロシア兵捕虜として同胞のフィンランド福音ルーテル派教会員が熊本の渡鹿練兵場に収容されていた頃である。そして、一九〇七（明治四〇）年には岡谷、一九〇八（明治四一）年には上諏訪に講義所を開設し、一九〇九（明治四二）年に



Lähetyssäsema Iidaan rakennettiin vuonna 1909.

1909年 飯田教会 フィンランドルーテル福音協会

は飯田、甲信地区全体へと伝道地は広がつていった。第二次世界大戦後の一九五三（昭和二八）年に、福音ルーテル教会（フィンランドルーテル福音協会 L E A F）は日本福音ルーテル教会と再合同し、日本福音ルーテル諏訪教会として、主イエスの福音を宣べ伝えるルーセランミッショントを担つてゐるのである。

讃美歌二九八番・教会讃美歌三三三七番「フィンランディア (Finlandia)」⁽¹¹⁾は称える。

- 1 やすかれ、わがこころよ、主イエスはともにいます。いたみも苦しみをも おおしく忍び耐えよ。主イエスのともにませば、たえぬ悩みはなし。
- 2 やすかれ、わがこころよ、なみかぜ猛るとき

も、父なるあまつかみの みむねに委ねまつれ。み
手もてみちびきたもう のぞみの岸はちかし。

3 やすかれ、わがこころよ、月日のうつろいな
き み国はやがてきたらん。うれいは永久に消えて、
かがやくみ顔あおぐ いのちのさちをぞ受けん。
(ふじもと まこと／九州学院一〇〇周年記念歴史資
料・情報センター長)

【注】

(1) 一八九八(明治三二)年一〇月二日、山内直丸牧師夫
妻と副島松一(第五高等学校学生・花陵会第二回生)
の三人でルーテル教会の熊本での最初の礼拝(三位一
体後第一七主日)を午前一〇時より執り行なった。熊
本教会設立(六間町本渡屋薬舗跡の階上)。

一九〇〇(明治三三)年一二月一四日、C・L・ブラ
ウン宣教師が家族と共に佐賀から来熊し、新屋敷町
四三五番地に仮寓。熊本在留最初の宣教師として熊本
伝道開始。翌一五日、熊本教会(上通町五八番地)で
歓迎会を行なつた。

一九〇二(明治三五)年七月六日、熊本教会は建丁(明
午橋通り)に新たな講義所を設置。七月一四日、熊本
教会は五番目の仮会堂を新屋敷町四三五番地に移転。
九月一日、六番目の仮会堂を新屋敷町三八八番地に移
転。

(2) ニコライ2世(在位一八九四年～一九一七年)は皇太
子時代の一八九一年、シベリア鉄道の起工式に参列す
る途中、ロシア軍艦で日本に立ち寄り、長崎、鹿児島、
神戸、京都などを観光した。五月一一日に滋賀県大津
で襲撃され負傷する大津事件が起きたが、その時の血
痕付着のシャツのDNA鑑定によつて、暗殺され不明
となつていたニコライ元皇帝一家の遺骨の確認がなさ
れたのは、一〇〇八年のことであった。

(3) 以下、Wikipedia「ロシア帝国の歴史」・「ニコライ・
ボブリコフ」など参照。

(4) ニコライ2世が「二月宣言」を発表した一八九九年に
は、ジャン・シベリウス(Jean Sibelius一八六五年～
一九五七年)が交響詩『フィンランディア』(Finlandia)
作品二六を作曲した。当初の曲目は「フィンランドは
目覚める」(Suomi herää)で、帝政ロシアによる新聞
への弾圧に対して企画された新聞祭典の催しの歴史劇
のための伴奏音樂を八曲からなる管弦樂組曲とし、そ
の最終曲を改稿して独立させたものである。フィンラ
ンドへの愛国心を湧き起こす曲として、帝政ロシア政
府はこの曲の演奏を禁止処分にした。一九四一年に詩

人のヴェイツコ・アンテロ・コスケンニエミによつて歌詞がつけられ、シベリウス本人が合唱用に編曲して「フィンランディア贊歌」となつた。当时、スターリンが支配するソビエト連邦の露骨な侵略により、国家存続の危機にあつたフィンランドの人々を奮い立たせる贊歌であり、フィンランドでは現在も国歌に次ぐ第二の愛国歌として広く愛唱されている。また、この旋律に歌詞をつけて日本では讃美歌二九八番・教会讃美歌三三七番として歌われている。

(5) こうしたロシア国内や属国フィンランドでの動乱は、明石元二郎（一八六四年～一九一九年、陸軍大将・勲一等・功三級・男爵、第七代台湾総督）の諜報活動工作によって惹起された局面が大きい。

ロシアの首都・サンクトペテルブルグの日本公使館駐在武官だった明石元二郎大佐は、日露戦争開戦に伴いスウェーデンのストックホルムに拠点を移し、ロシア革命の運動家に資金を供給して画策した。日露戦争中の一九〇四年から一九〇五年にかけて起きた諸事件、内務大臣・プレーヴェの暗殺事件、セルゲイ公暗殺事件、血の日曜日事件、戦艦ポチョムキン反乱事件などの背景には、明石の工作資金が動いていたといわれる。

陸軍参謀本部参謀次長・長岡外史は、「明石の活躍は陸軍一〇個師団に相当する」と評し、ドイツ皇帝・ヴィルヘルム2世は、「明石元二郎一人で、満州の日本軍部

二〇万人に匹敵する戦果を上げている」と言つて称えたという（Wikipedia「明石元二郎」など参照）。

(6) 一九一七年には「二月革命」によりニコライ2世の帝政が倒れ、三〇〇年続いたロマノフ朝は終焉した。さらに「十月革命」でボリシェヴィキ（赤衛隊）が権力を掌握すると、フィンランドでは保守派を中心に独立論が高まり、一一月二三日（新暦一二月六日）にフィンランド議会は独立を宣言した。

(7) 故・飯星良弼氏（元熊本市連合少年団理事長、元熊本県体育協会副会長、日本福音ルーテル熊本教会員）の証言による。

(8) 德善義和編著『日本福音ルーテル教会百年史』（一〇〇四年一一月一〇日、日本福音ルーテル教会）一四頁。

(9) 一九〇〇（明治三三）年七月『路帖教報』第一號発刊、一九〇一（明治三五）年一月廃刊。『路帖新報』同年六月発刊、一九一一（明治四四）年廃刊。同年、『るうてる』発刊。

(10) 福山猛編纂『日本福音ルーテル教会史』（昭和二九年四月三〇日発行、日本福音ルーテル教会）五七頁。